

## 2 2 2 サラリーマンの社会 (3)

サラリーマンという不思議な存在。  
それをサラリーマン側から定義してみよう。

私達（自由業）から見れば、サラリーマンは会社に雇われる存在。時として、彼らのリストラの相談を受けることもある。しかし、サラリーマン側から見たら、サラリーマンにとって会社は自分自身なのだ。

それは次のような例で比較できると思う。仮に、安倍総理大臣（日本の社長）にしてみたら、私個人など、いつ死んでも良い存在だろう。しかし、私は「日本人である自分に誇りを持つ」。仮に、被災地で、津波に遭い、東京電力に住居を奪われ、邪魔者にされ、あちらこちらに小突き回されても、被災者は「日本人である自分に誇り」を持っている。これが米国流の雇用感と異なるところなのだと思う。

恐らく、米国では、IBMで働ける「自分」に誇りを持つのだろう。しかし、日本では「ソニーという会社に帰属している自分」に誇りを持つのだと思う。日本にとって、私は、どうしても良い存在だが、それでも私は日本という国に誇りを持つ。それと同等なのだと思う。

会社内には階層構造がある。嫌な上司に、嫌な部下。この人達と競い合わなければならないのがサラリーマンだと思うが、しかし、競ったとしても、それは「日本人である自分の誇り」を侵害しないし、逆に、競うこと自体が「日本を立派にする自分に誇りを持つ」ことになるのだ。

そして、「大企業の社員」という地位に誇りを持つのは、サラリーマン本人に限らない。その家族も「大企業の社員の家族」という誇りを持

つ。会社も、そのような家族の帰属意識を高めるために、社内行事など、多様なセレモニーを開催する。

だから、仮に、夫が地方に単身赴任で転勤することになっても、「大手企業の社員という誇り」があれば、本人も、家族も、それを喜んで受け入れる。自分が単身赴任し、働くことが会社の発展に寄与するのであれば、それは望んで行うことなのだろう。

自己責任の自由業や自営業者であれば、自分の住まいぐらいは自分で決めるが、しかし、サラリーマンにとって、それは不要なのだ。自分の一生である65歳まで「大手銀行の銀行員である自分」「裁判所の職員である自分」「東京都庁の職員である自分」がキープされている。

そして会社の中で、本店採用総合職、支店採用総合職、一般職の三層構造があり、その三層構造の中で、それぞれに権力を手に入れて行く。その権力の行使が「自分が帰属する組織を立派にするのに役立つ」のだから、努力しないはずがない。

リストラは、日本人にとっては「自分の喪失」であり、米国人にとってはIBMで働ける「地位の喪失」なのだろう。だから日本では、サラリーマンから名刺をもらったら、会社を誉めなければならない。もし、外国人から名刺をもらったら、その会社に勤めているキャリアを誉めなければならない。

文科省の役人というサラリーマンが構築し、学校の先生というサラリーマンが教育する小学校、中学、高校では、サラリーマンという社会以外は見えない。だから、学校教育は、必然的にサラリーマンを育てるシステムになる。そして、サラリーマンの三層構造の頂点を目指す東大こそが、究極的な進学目標になる。

では、誰でも「会社の社員である  
自分に誇りを持つ」ことが可能か。  
期間雇用の人達は、会社に対する帰  
属意識が持てないし、派遣社員の人  
達も、その誇りが持てない。それが、  
今の労働市場の問題なのだ。

1 4 4 5 字